

MACF 礼拝説教要旨
2023年6月4日
「人の子の日」

ルカによる福音書 17

22 それから、イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたが、人の子の日を一日だけでも見たいと望む時が来る。しかし、見ることはできないだろう。23『見よ、あそこだ』『見よ、ここだ』と人々は言うだろうが、出て行ってはならない。また、その人々の後を追いかけてもいけない。

24 稲妻がひらめいて、大空の端から端へと輝くように、人の子もその日に現れるからである。

25 しかし、人の子はまず必ず、多くの苦しみを受け、今の時代の者たちから排斥されることになっている。

26 ノアの時代にあったようなことが、人の子が現れるときにも起こるだろう。27 ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていたが、洪水が襲って来て、一人残らず滅ぼしてしまった。

28 ロトの時代にも同じようなことが起こった。人々は食べたり飲んだり、買ったり売ったり、植えたり建てたりしていたが、

29 ロトがソドムから出て行ったその日に、火と硫黄が天から降ってきて、一人残らず滅ぼしてしまった。

30 人の子が現れる日にも、同じことが起こる。

31 その日には、屋上にいる者は、家の中に家財道具があっても、それを取り出そうとして下に降りてはならない。同じように、畑にいる者も帰ってはならない。

32 ロトの妻のことを思い出しなさい。

33 自分の命を生かそうと努める者は、それを失い、それを失う者は、かえって保つのである。

34 言うておくが、その夜一つの寝室に二人の男が寝ていれば、一人は連れて行かれ、他の一人は残される。

35 二人の女が一緒に臼をひいていれば、一人は連れて行かれ、他の一人は残される。」

36† 37 そこで弟子たちが、「主よ、それはどこで起こるのですか」と言った。イエスは言われた。「死体のある所には、はげ鷹も集まるものだ。」

「人の子の日」

世の終わり、イエス様の再臨、あるいは終末の日、そういうことに対する興味は多くの人たちが持っていました。ファリサイ派の人も弟子たちも興味を持っていました。

でも、イエス様はそれに対して、あたふたしないように勧めていると同時に、それは瞬間的にすべての人に分かる形で「終わりがやってくる」と教えています。

でもイエス様は

しかし、その前に人の子は苦難を受けなければならない
排斥され、捨てられる・・・

と語っています。

この言葉をしっかり頭に、心に納めておく必要があります。

突然やってくる災害、厄災はあります。

イエス様は幾つかの例をあげています。

この場合、どちらも「神の裁き」によるものでした。

大洪水によるノアの出来事 と

ソドムとゴモラの滅亡

さらには、当時の社会ではローマ軍による武力侵略も想定内だったと思います。

神の裁きという発想を除いて考えても、わたしたちは突然やってくる災害については大いに自覚しながら生きていると思います。

日本では阪神淡路大震災とか東日本大震災とか、地震や津波の恐ろしさを

きわめて身近なこととして感じていますので、そういうことが起こることについては想定しやすいかもしれません。

その際、必死になって逃げる必要も教えられています。

さらに

34 言うておくが、その夜一つの寢室に二人の男が寝ていれば、一人は連れて行かれ、他の一人は残される。

35 二人の女が一緒に臼をひいていれば、一人は連れて行かれ、他の一人は残される。」

と教えられており、「友人と一緒になら、あの人と一緒になら大丈夫」という人への自信や「あの会社に入れば大丈夫」とかいう自信も案外脆いものであることを教えています。

「一人は連れて行かれ、一人は残される」一人は天に、ひとり地上に死ぬということが起こり得るわけです。

この前の箇所には「神の国はあなた方の間にある」という言葉がありました。

ここに希望を持つことが大事なのです。

その二人の間に「神の愛のきづな」が必要。

ノアには祈り合える家族がいました。

ロトには祈ってくれるアブラハムがいました。

イエス様はマタイによる福音書の中で

「19 また、はっきり言うておくが、どんな願ひ事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心をつにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。 20 二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」

(マタイによる福音書 18 章 19~20 節)

と語られ、祈り合える関係の中にイエス様がいてくださることを教えています。

あなたは、あなたで心を決めて「イエス様と繋がる」必要があります。他者に対して「あなたはイエス様に愛されています。イエス様が
いてくれてありがとう」と言っていますよ、という思いで関係を深めていくことが大事です。
終わりの時代だからこそ、そういう関係を深めつつ歩むことが大事です。

イエス様はこういうふうにも言われました。
「死体のある所には、はげ鷹も集まるものだ。」
これは一般的には、精神的腐敗、霊的腐敗、戦争、殺し合いのなかに
全ての崩壊があり、死があり、そこには悪魔のわざが溢れている。
と理解されています。

しかし、神様は、大量の死者の姿を見て、決して
「自己責任だ」
「自業自得だ」などとは言わないのではないのでしょうか。

先に述べた「イエス・キリストの苦難・人々からの排斥」による十字架の死は、まさに「神を
神としないような心を持った人たちを救い出すための死」であり、非業の死、悲劇的な死を遂げ
た人たちへの「救いを提供するための死でもあったはず」です。

キリストの共苦、キリストの愛の寄り添い、贖いにこそ希望がある。
つまり、「死体のある所には、はげ鷹も集まるものだ。」
ということわざは「悲観的な意味を持っていますが、
その状況の中に「死を滅ぼし、苦難を通過したイエス様が
飛び込んで、手を伸ばしてくださっていること」を、私たちは今、自覚
する必要があると思います。
「主イエスのいるところには死者の復活があり、再生の希望があり、新しい出発への希望があ
るからです。そして、その救い主を信頼している人たちが集まるはずだ」

聖書は「創造」で始まっています。
そのあと墮落と罪の歴史があり、イエス様による十字架と復活によって、「人間の創造」がもた
らされ、最終的にはすべてのものの「新創造」
で聖書の教えは終わっています。
つまり、すべてのことが「新創造」に向かっているのです。
だからこそ、わたしたちは「心をつなぎ合いながら礼拝し、一日を
丁寧に生きる必要があるのです。

そして、これが新創造の描写の一部です。

ヨハネの黙示録 21 章の 3 節 4 節。「21:3 そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな
声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神
は自ら人と共にいて、その神となり、21:4 彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。
もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。」

MACF 礼拝映像はこちらです。

<https://youtu.be/Hlmur1iEqTM>